

市役所職員
×
NPO法人みしまびと理事長
山本 希
さん

まちづくり特化型 最強公務員

三島市健康政策戦略室で、日々市民の方々の健康な生活を支える山本希さん。
山本さんは、公務員でありながらNPO法人みしまびとの理事長も務め、まちの「未来をつくる人をつくる」ために、みしま未来研究所をメンバーと共に運営している。公務員とNPO法人理事長、二足のわらじを履いてまちづくりに励む山本さんの想いを聞いた。

まち・ひと・しごと新聞

第7号

発行
三島信用金庫
駿東郡長泉町下土狩96-3
055-973-5730

制作

- 1面：日本大学三島高等学校新聞部
- 2面：熱海高等学校報道部
- 3面：沼津東高等学校新聞部
- 4面：莚山高等学校写真報道探究部

協力

静岡県東部地域局



みしま未来研究所で談笑する山本さん

行動力の源

山本希さんは、公務員として三島市や三島市の方々のために働いている一方、仕事以外にもNPO法人の活動で「まちづくり」について考えている。山本さんの所属するNPO法人みしまびとは、地域活性化の拠点として「みしま未来研究所（以下、みらけん）」を運営し、新しい人々の出会いの創出を目指して活動している。

まちを楽しみやすくするお手伝い

仕事とNPO法人の活動の両面から、まちづくりをする行動力の源を山本さんに聞くと、「一番の源は、『みしまびと』のメンバーと、まちを楽しみやすくするお手伝いをするのだ」と話した。加えて「仕事でもNPOでも、純粋にまちのためにやりたいことをやっている。また、みしまびとに加入したことで、市役所に入った時よりも仕事がよくなりました。」

始まりは映画製作

山本さんが、みしまびとに出会ったのは、二〇一四年。当

みらけんの三つの利用方法

「みらけん」には、交流や出会い、発見を生む3つの利用方法があると山本さんは話す。

まず1つ目は、コワーキング施設としての利用方法だ。コワーキングとは、個人事業主やリモートワーカーなど、場所に縛りがない人々のための共有型オフィススペースである。現在「みらけん」の

コワーキングでは、20名を超える多様な業種の月額会費の方々が、それぞれ働くサイクルで交流や出会い、発見を生む3つの利用方法があると山本さんは話す。まず1つ目は、コワーキング施設としての利用方法だ。コワーキングとは、個人事業主やリモートワーカーなど、場所に縛りがない人々のための共有型オフィススペースである。現在「みらけん」の



みしま未来研究所の外見

時、三島市立公園楽園の市役所職員として勤務していた。と、「地域の未来をつくる人をつくる」ため、三島を舞台とした映画「感うさぎ or the rain」の撮影を行っていたメンバーたちがやってきた。その後、みしまびとに加入し映画製作に本格参加した山本さんは、「三島とみしまびとが大好きになった」と振り返った。映画完成後、製作



学びの多い取材の様子

の経験を経たみしまびとは「地域の未来を語り行動する人が育つ場所」をつくりたいと考えたという。そこで、みしまびとの理事長に就任した翌年の二〇一九年、旧中央幼稚園（二〇一〇年廃園）を「みらけん」という「場」に変身させた。「みらけん」は、出会いや学びの場だけでなく、随所に残る幼稚園の面影から、懐かしの場としても定着し三島の中央のシンボルとなっている。

新しいに出会う「場」 Cafe & Bar Blooming



「みらけん」の一角にあるCafe & Bar Blooming（カフェ＆バー ブルーミング）は、おしゃれな店内で、クラフトビールやソフトドリンクを扱っている。アルコールだけでなくソフトドリンクのみの利用も多いため、高校生でも気軽に入ることができる。特に、コーヒーや紅茶、瓶ジュースは、200円と手ごろな値段だ。

そんなBloomingに散歩途中に訪れる人、繋がりを求めて起業を考える若者、移住してきた親子など、様々な人がやってくる。年齢も業種も、目的も立場も違う人たちの「入口」として、成り立っている。ある話として、リモート授業になり、家にこもりがちになっていた大学生が、繋がりを求めてふいに立ち寄った結果、様々な職種の人と出会い夢を追いかけられるようになった。そのような風景をここでは日常的に見ることができる。『楽しさや悩みを共有できる場』『自分も何かやりたいとかりたててくれる場』『頑張れと応援してくれる場』。今日も、Bloomingは誰かの新しい「場」となっている。

編集後記

日本大学三島高等学校新聞部です。今回、NPO法人みしまびと理事長の山本希様に取材しました。その中で私たちが、みしま未来研究所及びみしまびとが担っている、「人と人とのつながりを作る」という役割の大切さを深く知ることができました。また、それだけではなく山本様がその繋がりによって体験した事も聞くことができ、私たち自身、貴重な経験ができました。最後になりますが、このような貴重な機会を提供して下さった三島信用金庫様、静岡県東部地域局様、本当にありがとうございます。

- 一面担当 日本大学三島高等学校
- 石田 権心 望月 風花 大西 駿
- 石井 大翔 梅原 恒輝 神保 颯太
- 渡邊 菜央



レンタルスペースを使う新聞部



2022年夏にリニューアルされた中庭を見渡すことのできるダイニング

カルチャーサロン「mizi-cul」とは



ミヂカルが行われる部屋

ミヂカルは「身近なカルチャー」の略で、熱川プリンスホテルが昨年8月から始めた新しい取り組みである。時代の変化が速い中、宿泊業だけではいけないということでスタートし、宿泊されるお客様がチェックイン前、チェックアウト後の時間に利用したり、地域の方も宿泊せずに利用できるサービスだという。

ミヂカルでは「美と健康」、「ものづくり」、「伊豆の食」、「癒し」の4ジャンルの講座が行われており、例えばヨガやアロマ体験、陶芸教室、グルテンフリーのフルーツづくり、温泉を使用した石鹸作り、恋愛講座などがある。地元の良さを発信するため、講師には地元の人を起用している。その中には、大手企業で活躍された人材もあるそうだ。講師の方だけでなく、様々な人がSNSでミヂカルの魅力を発信してくれることで、人と人の繋がりが広がり、新たな商品開発のアイデアにもなっている。この「ミヂカル（副業）」を取り入れようと思った経緯については、「コロナ禍により大きく激変している時代に適応していくためには、大手企業で活躍された方のキャリアを活用して、永続的に経営可能な経営力を高めることが必要。片腕となって盤石な会社へと導いてくれる人材の支援を求めて参加させていただいた。」と、嶋田社長は語った。12月12日には、クリスマスバージョンのフラワーアレンジメント教室も開催された。



酒棚の扉も開けていただいた



ロビーに飾られたツリー

は月、朝の眺めである。夜は満月、朝

「ミヂカル」を発売させた。（上記参照）この癒しをテーマとした地域の魅力発信講座に参加することにより、宿泊客だけでなく、地域の方にとっても自分磨きや自分発見の場になる。今後どのような発展していくか、大いに注目したい。

ホテルの売り

ホテルの一番の売りは、屋上からの眺めである。夜は満月、朝

私たちがこのような企業の動きに任せるのではなく、自分たちの住む街の将来について考えて、盛り上げていかなければいけないのかもしれない。【二面担当】
県立熱海高校報道部

「泊まる」だけのホテルから「ミヂカル」なホテルに

伊豆熱川温泉 熱川プリンスホテル

コロナ禍で大打撃を受けた宿泊業、宿泊者数の減少や営業休止などで四苦八苦したホテル。旅館は多いだろう。今回取材した熱川プリンスホテルもコロナ禍に苦しんだホテルの一つである。コロナ禍で苦勞したこと、ホテルとして大切にしていること、高校生に向けたメッセージを伺った。

熱川プリンスホテルが目指すもの

熱川プリンスホテルの経営理念は「人と人との繋がりを大切に、関わる全ての人々の喜びと感動への追及を通じて、社会の進歩・発展に貢献する。」である。この「関わる全ての人」というのは、お客様や社員だけでなく、取引している会社や銀行などホテルを支えている全ての人を指している。代表取締役社長の嶋田慎一郎さんは「いつまでも新鮮さを漂わせる、さわやかでやさしさ溢れる宿でありたい。」と語った。

コロナ禍で今までのようにお客様に密に接して、手厚いサービスが出来なくなってしまうが、直接接してサービスする時間を減らす代わりに紙媒体での案内をしたり、料理はお品書きに料理に対する思いが分かるようにしたりする工夫を省略するのではなく、別の形でお客様と繋がりを持つことを心掛



代表取締役社長 嶋田 慎一郎さん

また、熱川プリンスホテルは時代に合わせホテルの形態を変化させてきたということ。今年で、創業63年。次なる60年へ向けて、これからも人と人の繋がりを大切にしていきたいという。

自分磨き・自分発見

時代に合わせて、旅館の形態を変化させてきた熱川プリンスホテルだが、さらに今、新しいチャレンジとして「ミヂカル」を発売

させた。（上記参照）この癒しをテーマとした地域の魅力発信講座に参加することにより、宿泊客だけでなく、地域の方にとっても自分磨きや自分発見の場になる。今後どのような発展していくか、大いに注目したい。



熱川プリンスホテルの外観

高校生に伝えたいこと

高校生に向けて、嶋田社長に話を聞いた。「これから社会に出ていく上で、もっと色々な人とかわかって、視野を広げ、良いものを吸収してほしい。当ホテルも海外スタッフだけでなく副業人材の力も借りながら変化している。これから、この将来を担う人材となる高校生は、多様性が鍵となる社会の中で、より国際的に発展していく必要がある。もっと向上心を持って自分を高めていってほしい。そしてできれば、様々な経験を通して、最終的には地元に戻って、地域を盛り上げてほしい。地域貢献してもらえたらとても嬉しい。」と語った。



嶋田社長（中央）と本校報道部員

出が絶景だ。伊豆熱川温泉は高台に位置し、海・雲・星空・満月など見渡す眺望と所有する豊富な温泉源が特徴的だ。海と山に囲まれた特異な地域で源泉を使った温泉は、ホテルの自慢となっている。決して大規模なホテルではないが、アットホームな雰囲気と地元の人のみならず、癒しを求めて、都会の人にも人気を博している。

編集後記

今回取材させていただいた熱川プリンスホテル様は、「全ての人」との「繋がりを」を何より重視しており、ミヂカルのような地元の人々と繋がって提供しているサービスがあるというところが分かりました。話を聞いてみると、地元の魅力を知ってもらいたいという思いやコロナ禍の影響もあって、ホテルの在り方を変えなければならぬという思いが伝わってきました。

目的の地を

「沼津港」へ

佐政水産株式会社

佐政水産株式会社は創業から百年以上、沼津港で水産業を営んでいる。近年は沼津港深海水族館や港八十三番地の運営の事業も始め、沼津市の活性化に貢献している。沼津港の改革について、代表取締役社長の佐藤慎一郎氏に話を聞いた。

3つの面を持つ

沼津港周辺

沼津港が有名な観光地として栄えているのは、沼津のポテンシャルを活かした佐政水産株式会社の斬新な改革に拠る所が大きい。

深海魚を含む沢山の魚が水揚げされる沼津港は「生産地」の一面や、その強みを活かして全国に新鮮な魚を届ける「市場」としての



◀深海魚をモチーフとした壁画

一面を持つ。さらに沼津港には深海水族館や新鮮な魚介を使用した飲食店、深海水族館が建ち並ぶ港八十三番地があり、アトラクションも設置されているので、漁港という特性を活かした「消費地」としての一面も持っている。



▶地域創生について語る 佐藤慎一郎さん（沼津東高校90回卒）

革新的な改革

佐政水産の事業は飲食やエンターテインメントまで多岐にわたる。海鮮丼や浜焼きだけでなく、イタリアンレス

トランやカフェを運営したり、パンを売ったり、深海水族館を開館したり、斬新な経営を行っている。

新事業

続々スタート

▲一月にオープンしたばかりの新アトラクション

佐政水産は現在、沼津港で新事業を次々に展開している。アトラクションゲーム、ベーカーリー、イタリアンカフェの運営に加え、VRアトラクションも一月にオープンした。「沼津を変えるのは今しかありません。だから様々な人々の要望を満たすように新しい物を作っています」と佐藤氏は語った。

お客さんも

一緒に笑顔に

イベントなしで人が来る場所へ

佐藤氏にとって、地域創生に大事なものは従業員も顧客も共に満足することだ。さらに、佐藤氏は「沼津市民が地域の良さを知ることが大切です。行政には主導よりも、後押しをすること望みます。地域

従業員も

笑顔に

沼津の持つポテンシャル

沼津港周辺の改革を推し進めた佐政水産株式会社・代表取締役社長の佐藤慎一郎氏に、改革を行った理由を尋ねた。「子どもの頃から市場でせりの手伝いをして

学校へ行くことが日課でした。留学から帰ってきて、沼津港のせりの衰退ぶりに危機感を覚え、沼津港を再建しようと強く思いました」と語った。

沼津港は、深海魚をはじめとした沢山の魚を新鮮な状態で運ぶことができるのに加え、都心にも近いので日帰りでも多くの人が観光を楽しめることができる。

佐政水産の軌跡

- 1950 佐政水産株式会社 設立
- 2003 専務取締役佐藤慎一郎氏就任
- 2005 通販「沼津港SAMASA」開設
- 2011 港八十三番地 沼津港深海水族館オープン
- 2019 港八十三番地拡張 イタリアンレストラン、カフェベーカーリーなどがオープンする
- 2021 新社長に佐藤慎一郎氏就任

編集後記

今回の取材で、沼津港の改革には、様々な工夫が施されていることが分かった。沼津港の改革を通して、沼津が多くの人々に「また訪れたい」と思ってもらえる場所となることを確信した。

担当

沼津東高校新聞部

誰もが楽しめる空間づくり



▲一月にオープンしたばかりの新アトラクション

VR深海アドベンチャー

「沼津を変えるのは今しかありません。だから様々な人々の要望を満たすように新しい物を作っています」と佐藤氏は語った。



▲沼津港内にあるパン屋さん

好きになくとも地域活性化

negura campgroundオーナー 渡部竜矢さん

今回、韮山高校写真報道探究部は、negura campgroundのオーナーである渡部竜矢さんに取材を行った。キャンプ場オープンまでの道のりや、今後の展望、趣味を仕事にすることについて話を聞いた。

趣味を仕事に

negura campground
を作りあげた渡部さん

は、以前は東京でIT系の会社に勤務していた。仕事を辞めて、キャンプ場を開いた理由を聞いた。「大変で、やりたくない仕事から抜け出したいと

日々思っていました。そこで、好きなことで生活していこうと心を決め、長年の夢であったキャンプ場のオーナーになるために、土地を探し始めました」

安定してはいるが本意な仕事を続けていくか、未知で不安要素がありながらも好きな仕事をするか、これは渡部さんにとって大きな選択だった。迷いながらも、キャンプ場の仕事を選んだ渡部さん。「辛いことなんて何もないです。楽しいことばかりです」と力強く語った。



薪割り体験をする部員

取材の途中、渡部さんは焚き火に火をつけ、部員に薪割り体験をさせてくれた。その様子を笑顔で見守りながら「好きなことの延長線上に仕事を考えることが大切です」と語る渡部さん。「実際に、趣味に全力を注いだ過去が今の自分に活



函南町との繋がりを深めたい

きています。いつまでも子どものような気持ちを持っていろいろな経験をすることが、将来の生き方につながることもあると思います。好きなことを仕事にしている人が増えれば、世界はもっと幸せになると思います」

6年前、その値段の安さなどを理由に東京で働きながら函南町の別荘地に引っ越してきたという渡部さん。美しい夕焼けや富士山、駿河湾を眺めることができるこの土地を選び、このキャンプ場を作った。キャンプ場に多くの期待が寄せられる様子を見て、次第に地元を元とする立場になってきたことを感じていたという。「函南町の人々はとてもフレンドリーなので、この人たちに愛されたいと思うようになりました」と語る。「今このキャンプ場では焚き火をするための薪の用意がとて大変です。地域と連携して間伐を行い、その間伐材

を利用して薪にするというアイデアがあります。他には、地元の食材やお酒をキャンプ場で提供できるようにすることも。地元との繋がりを少しずつ深めていきたいと、いろいろなることを考えています」

～プロフィール～

渡部竜矢 (わたなべ たつや) さん
・negura campgroundオーナー

函南町在住。東京のIT企業を退職後、函南町でのキャンプ場作りを決意。Twitterでの発信を経て、2021年に行ったクラウドファンディングでは、開始から3時間で目標としていた140万円を達成し、最終的に1190万円もの資金を集めた。



キャンプ場への思い語る

理想のキャンプ場へ

negura campgroundは、2021年に渡部さんが個人で始めたものだ。そこから「Mitter」等のSNSで仲間を募り、いろいろな人の支援を受け、オープンに至った。「Mitter」のアカウントでは、キャンプ場を作る過程をリアルタイムで発信し、働いている大人の世代の大きな反響を呼んだ。「好きなことを仕事にしてみたい」という夢を託すような気持ちで、渡部さんのアカウントを見守っていた人が多かったという。

このキャンプ場の魅力について、渡部さんは「一番の魅力は景色です。富士山から駿河湾まで見渡せる景色は、遠くから来てくれるお客さんがとても喜びます」と語った。県内や神奈川、東京からの客が多い一方で、SNSでの発信の効果もあり、札幌

や大阪、九州地方など遠くから来る人もいます。これからの施設はどんどん充実させていくという。特に力を入れるのは管理棟だ。ただ受付をするだけではなく、バーを作ってお酒を飲めるようにしたり、音楽を流せるようにしたりするという。現在の完成度は40%くらい。渡部さんは「キャンプと音楽の組み合わせは、音楽がうるさいものとされていて、一般にはタブー視されています。キャンプ場では、なかなかないものなので実現させたいです」と熱く語った。negura campgroundは渡部さんが思う「自分が見たいキャンプ場」に向けて日々進化している。これからの更なる進展が楽しみだ。



キャンプ場からの景色

編集後記

薪割りの体験を通して普段の高校生活では感じられないような清々しさを感じました。また、アウトドアはたくさんの方の魅力のあることだと気づいたのでこれからもそのような体験をして楽しんでいきたいと思えます。

今回取材に協力してくださった方々に、この場を借りてお礼申し上げます。未熟な点多いですが、楽しんでいただければ幸いです。

「4面担当」
県立韮山高校

写真報道探究部